



祐介の目

No.178

大田祐介 (福山市議会議員)

消したと思われる。迫田監督の後任の長門監督代行、小田監督も迫田イズムを継承したが、市立福山の甲子園出場の際の立て役者は、中学生の硬式野球チームであると感じている。甲子園で3

福山市立福山高等学校

この夏の話題は市立福山高校の甲子園出場がさらっていた。甲子園への道は名将・迫田監督の招聘から始まった。監督と親交のある方が枝広市長に紹介し、市長の英断により令和4年4月からの迫田監督就任が決定した。

しかし、期待よりも学校の方向性が変わるのでは？という不安が保護者より多く寄せられた。当時の教育委員会会議でも「迫田監督を招聘することでは今後どのような学校にしていけるのか？保護者にどう説明するのか？」という厳しい指摘があった。議会においても令和3年9月議会にて羽田俊介議員が「果たして文武両道は実現するのか？」と教育委員会を質している。

また、グラウンド整備に2億7千万円、室内練習場に7千万円をかけた事も過剰な投資ではないかという批判があった。そのような批判も甲子園出場という成果の前に雲散霧

打数2安打の大活躍をした早川選手は、私が顧問を務める福山リトルシニアの卒団生であり、文武両道を目指すために市立福山に進学したと聞いている。

学校としても文武両道の一環としてグローバル人材育成事業に取り組んでいる。地元中小企業や団体のSDGsにつながる取組を研究し、頂いた課題の解決を探る「探究的な学び」の活動である。この活動を通して備後地域の魅力と課題を発見し、地元の持続的発展に関わっていくという趣旨で、山野峡大田ワイナリーは6年間連続で希望する生徒を受け入れている。甲子園でライトに飛んだ難しい球を好捕した栄谷選手もワイナリーを選んだ一人だった。

今回、スポーツの持つ団結力や経済効果など、多くの成果を市民は目の当たりにした。スポーツによるまちづくりがさらに進むことを期待したい。さて次なる一手は何か、市民球場の建て替えだろうか？